難民のために、難民とともに
www.japanforunhcr.org

With You

JAPAN FOR UNHCR
国連UNHCR協会

国連UNHCR協会ニュースレター［ウィズ・ユー］
2020年6月｜第43号

特集

「逆境を越えてTokyoへ！」世界の難民アスリート

追悼　第8代国連難民高等弁務官　緒方貞子さん

© 国連UNHCR協会 / Atsushi Shibuya

どんなに困難でも。

いつ、この過酷な状況から抜け出せるのだろう。
世界中が未知の危機に立ち向かう今、私たちは今日も走り続ける。
必ず、この壁を乗り越えてみせる。自分の力の限りを尽くして。
私たちは、絶対にあきらめない。
We are refugees. We are a symbol of Hope.

©国連UNHCR協会/Atsushi Shibuya

新型コロナウイルスの感染拡大で、東京オリンピック・パラリンピックは延期され、世界との行き来ができなくなるなど、今まで経験したことのないような困難な状況が、私たちが暮らす世界を覆っています。避難生活の中、TOKYO2020を目指してきた難民アスリートたちも、掲げてきた目標が突然先送りになりました。

リオオリンピックに難民選手団の一人として出場し、東京マラソン2020でも完走を果たしたヨナス・キンディ選手は言います。「私たちはコロナウイルスにより世界中で困難な局面を迎えています。特に難民や難民アスリートにとっては厳しい状況です。頑張り続けましょう、努力し続けましょう。私もマスクを着けて1人で頑張っています。あきらめず闘い続けましょう。希望はまだそこにあります。安全に、そして努力し続けましょう!」

今号では、世界各地でTOKYO2020を目指し、厳しい練習に打ち込む難民アスリートたちの物語を特集します。

©UNHCR / Benjamin Loyseau

史上初めての難民選手団
——リオオリンピック・パラリンピック

2016年のリオオリンピックでは、史上初めて「難民選手団」が結成され、10人の難民アスリートが出場を果たしました。開会式で難民選手団がスタジアムに姿を現すと、満場の観衆が大歓声のスタンディングオベーションで迎えたことは、現地で見守っていたフィリッポ・グランディ国連難民高等弁務官をはじめ、多くの人の心を打ちました。

今、知ってください。難民アスリートたちの物語を。彼らの母国で起こっていることを。

今、世界中で家を追われた人は、約7000万人を超えています。紛争で家を失ったり、迫害を受けて命の危険にさらされるなど、自分と家族の命を守るために避難するほかなかった人々は、命がけでたどり着いた避難先でも、支援なしでは暮らせない過酷な生活を送っています。難民アスリート一人ひとりが、そうした困難の中、ひたすら練習を続けているのです。

ユスラ・マルディニ選手＜競泳＞

（シリア・ダマスカス⇒ギリシャ⇒ドイツ）

2013年にシリア代表として競泳の世界選手権に参加したユスラ選手。紛争を逃れ地中海を航海していた際、ボートのエンジンが止まってしまいました。17歳だった彼女は海へ入り、姉と共にボートを押し始めました。そしてなんとか海岸にたどりつくことができたのです。その後ドイツへ逃れ、難民選手団の一員として選ばれました。

◆2011年3月に紛争が始まったシリアでは、今も終結の見通しはたっていません。今年10年目に入った戦闘により多くの人が亡くなり、北部のアレッポやホムス、イドリブなど多くの街が空爆で壊滅的な被害を受けてきました。住民の7割は厳しい貧困に苦しんでおり、世界で最も多くの人々が他国へ逃れています。

©UNHCR / Jordi Matas

©UNHCR / Kim Badawi

ポポル・ミセンガ選手＜柔道＞

（コンゴ民主共和国⇒ブラジル）

ポポル選手がコンゴ民主共和国で家族と生き別れたのは、まだ幼い頃でした。8日間森をさまよった後に救助され、避難民の子どものための施設で彼は柔道と出会いました。「子どもには何をするべきか教える家族が必要ですが、私にはいませんでした。柔道が私に平常心、規律、義務…すべてを教えてくれました」と語った彼は、リオオリンピックの予選で一勝をあげ、大きな喝采を浴びました。

◆コンゴ民主共和国では、1996年に戦争が起こって以来戦闘がやまず、市民に対する暴力や性的暴行、子どもの徴兵などが人々を苦しめています。頻発する戦闘のため、国内避難民の数はアフリカで最も多い450万人となっています。また多くの子どもが急性栄養不良の危険にさらされており、エボラ出血熱の流行も大きな問題です。

ローズ・ナティケ・ロコニエン選手＜陸上＞

（南スーダン⇒ケニア）

8歳の時、紛争のためケニアに避難してきたローズ選手。実は彼女は、リオオリンピックの約1年前まで自分の才能を知りませんでした。難民キャンプで難民選手団選考会への参加を勧められ、出場して2位になったことが彼女の人生を変えたのです。リオの開会式で旗手を務めた彼女は、2019年にTICAD7*に合わせて来日し、東日本大震災の被災地・陸前高田市も訪れ、多くの人々と交流しました。

＊第7回アフリカ開発会議

◆南スーダンは、2011年に独立した世界で最も新しい国です。40年以上内戦や戦闘が続いた影響で、教育や医療など基本的な社会サービスが著しく不足し、インフラ整備も遅れています。深刻な貧困と情勢不安が続いているため多くの人々が近隣国へ避難しており、アフリカで最も難民を生み出している国です。避難している人の約60％は18歳未満の子どもです。

©UNHCR / Tobin Jones

©UNHCR / Gordon Welters

ヨナス・キンディ選手＜陸上＞

（エチオピア⇒ルクセンブルク）

ヨナス選手にとって、母国から避難した記憶は未だにつらいものです。「とても厳しい状況でした。エチオピアで生きることは私には不可能でした…命の危険があったのです。」彼はその後ルクセンブルクに逃れ、フランス語を学びタクシーの運転手をしながらトレーニングを続け、リオへの切符を手にしました。2020年3月、東京マラソン2020では腹痛に見舞われながらも無事完走しました。

◆エチオピアは80以上の民族が暮らす多民族国家で、長年、民族対立もからんだ抑圧的な政治が続き、以前から反政府抗議運動とそれに対する弾圧が繰り返されてきました。メディアへの弾圧や規制など報道の自由が奪われ、ジャーナリストや一般市民が政治犯として逮捕・殺害されてきたため、多くの人が日本を含め国外へ避難しています。

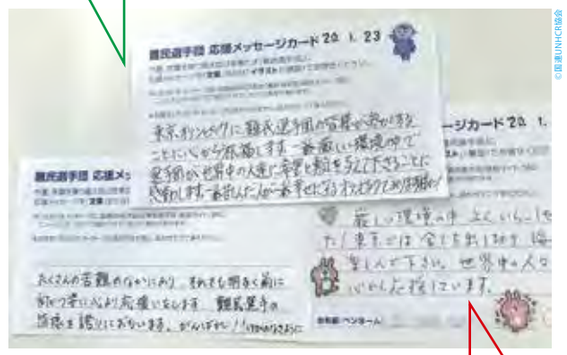
©Xxxxxxxx

これからもみんなで声援を送ろう！世界の難民アスリートたちへ

難民アスリートへの応援メッセージを募集したところ、多くのメッセージやイラストが寄せられました。お送りくださった皆様、本当にありがとうございます。

困難な状況にある難民への共感、思いやりのこもったメッセージの数々に、私たち職員も胸をうたれ、とても勇気づけられました。その中から皆様にいくつかご紹介します。

東京オリンピックに難民選手団の皆様が参加することに心から祝福します。一番厳しい環境の中で選手団が世界中の人達に希望と勇気を与えて下さることに感動します。一番苦しんだ人が一番幸せになるオリンピックであります様に！



©国連UNHCR協会

厳しい環境の中、よくいらっしゃいました！東京では全てを出し切り、悔いなく楽しんでください。世界中の人々が皆様を心から応援しています。

たくさんの苦難のなかにあり、それでも明るく前に向かう姿に心より応援いたします。難民選手の皆様を誇りにおもいます。がんばれ!! けがのなきように。

©国連UNHCR協会 / Atsushi Shibuya

ケニア視察レポート｜ケニアで出会った難民アスリートたち

2020年2月、国連UNHCR協会の報道ディレクターの長野智子と職員がケニアを視察。
オリンピックに向け練習に励む難民アスリートに会いました。高地合宿でのアスリートたちの練習とその思い、難民キャンプで暮らす彼らの家族、そしてキャンプで出会った難民の子どもや若者たちの姿などをご報告します。

2月18日(火)

標高2400メートル・イテンで合宿を視察

ナイロビから飛行機で約1時間、エルドレッドに到着。アスリートの高地トレーニングで有名なイテンは標高約2400メートル。世界中から練習に来ていた多くのアスリートとすれ違いました。ローズ・ナティケ・ロコニエン選手などIOC奨学生のアスリートたちの合宿所へ着くと、彼らと一緒に練習場に移動しトレーニングを視察しました。

広いトラックをあっという間に一周して戻ってくる速さと、フォームの美しさには目を奪われるばかり。インタビュー後、ローズ選手に支援者の皆様からの直筆メッセージを手渡すと、時に真剣な顔で、時に微笑みながら読んでいました。

©国連UNHCR協会 / Atsushi Shibuya

©国連UNHCR協会 / Atsushi Shibuya

©国連UNHCR協会 / Atsushi Shibuya
合宿初日のローズ選手たち。強い日差しの中、整備されていないトラックをひたすら走る。間近で見るトップアスリートの迫力に圧倒された

2月19日(水)

カクマ難民キャンプのローズ選手の家族を訪問

再び飛行機で北部のカクマ難民キャンプへ移動。南スーダン難民など約20万人が避難するこの広大なキャンプで、前日に取材したローズ選手の家族を訪問しました。リオオリンピックで旗手を務め、日本を含め世界中を飛び回るほど有名になったローズも、始まりはこの難民キャンプだったのだ、と感慨深い思いに。弟のトムは、「いつも姉は僕たちの世話をしてくれました」と話し、幼い頃の家族写真を見せてくれました。サッカーチームに入っている彼は、ユニフォームに着替えてサッカーボールの足さばきも披露してくれ、やはりアスリート一家なのだと感心しきりでした。

©国連UNHCR協会 / Atsushi Shibuya
ローズ選手の部屋の前にて、母親と弟のトム。
トムの着ているTシャツはローズからの日本土産だそう。

2月20日(木)

カクマ難民キャンプの難民アスリートたち

早朝6時、UNHCRの車で再びカクマへ。まだひんやりとした空気の中、グランドではすでに難民アスリートたちが走っていました。日中の気温が40度を超えるカクマでは、早朝に練習しています。彼らはローズ選手ほどのトップ選手ではありませんが、将来を期待されている選手たち。そして続々と子どもたちが集まってきました。練習終了後、整理体操する選手たちのすぐそばで上手に真似をする子どもたちは微笑ましい限り。同時に、「この子どもたちの中から未来のオリンピアンが生まれるかもしれない」という思いも頭をよぎりました。

カクマ難民キャンプには多くのスポーツチームがあり、あちこちで練習やアクティビティが行われていました。難民キャンプで生まれ育ち、教育の機会も限られ過酷な生活を強いられる中、スポーツに打ち込むことで子どもたちや若者は明るさを取り戻し、心と体を育んできたのだと感じました。

©国連UNHCR協会 / Atsushi Shibuya
夕方、難民キャンプでバスケットボールの練習試合をする若者たちに遭遇。ダンクシュートが決まった瞬間、わあっと歓声があがった

©国連UNHCR協会 / Atsushi Shibuya

©国連UNHCR協会 / Atsushi Shibuya
「愛と人間性に色はありません。
私は難民と共に立ちます。
私のスポーツ、私の誠実さ
平和のためのスポーツをすべての人に。
ありがとう。ローズ・ナティケ」

「難民アスリートを一緒に応援してください！」

実はこのケニア視察のさなかに、当協会でも職員の在宅勤務が始まりました。「緊急事態宣言」が発令され社会の緊迫感が高まる中、思うのは難民アスリートたちのことでした。彼らはみな紛争や迫害の犠牲者でありながら、自分の境遇を嘆くよりも、自分のいる場所で精一杯の努力を重ね前へ進み続けています。今こそ真に、私たちが難民から学ぶべきことがある。そう思えてなりませんでした。この危機を、難民を始め世界中の人々と一緒に乗り越えましょう。そして、これからも難民アスリートを一緒に応援してください!

国連UNHCR協会 報道ディレクター　長野智子より

五輪延期という厳しい状況の中、今も難民アスリートたちは「東京」を目標に厳しい練習に励んでいます。明けない夜はないことを誰よりも知る彼らの夢を、一緒に応援して頂けたら嬉しいです。

「日本で会いましょう」ローズ選手と握手する長野 ►

©国連UNHCR協会 / Atsushi Shibuya

©UNHCR / F.Brissaud

追悼・緒方貞子
第8代国連難民高等弁務官

「命というものをいちばん中心に考えるわけですよ。人間を預かっているわけですからね。」

世界で最大の難民援助機関、UNHCRの日本人初のトップとして1991年から2000年まで指揮をとった緒方貞子さんが、2019年10月に逝去されました。冷戦終結直後、湾岸戦争のさ中に就任し、数々の苛烈な人道危機に直面しながらも、「UNHCRの任務は難民の命を守ること」を貫き通した緒方さん。類まれな能力と卓越した指導力でひるむことなく活動を率いた10年間とその功績を振り返ります。

相次ぐ紛争と人道危機、激動の10年間

1991

◎国連難民高等弁務官に就任

「昼夜を分かたず、戦時にも平時にも人道援助の最前線に立つ、果敢で献身的な職員によって成り立つUNHCRのかじ取りを、光栄にも任されたのである」[1]

◎湾岸戦争・イラクからクルド難民180万人流出。
UNHCR、国内避難民への支援に踏み切る

©UNHCR / J.Cosp

「私はやることに決めました。彼らが国境を越えようと越えまいと、UNHCRは被害者とともに、そして傍らにいるべきなのです」[2]

クルド難民の子どもたちと

1992

◎ボスニア・ヘルツェゴビナが独立、内戦に突入。
殺戮や組織的なレイプなど「民族浄化」が激化
◎UNHCR、サラエヴォへ人道空輸作戦開始（～1996年）

©UNHCR / S. Foa

サラエヴォ空港で多国籍部隊の司令官と

1994

◎ルワンダ大虐殺。4日間で100万人以上のルワンダ難民が旧ザイールへ流出
◎アフリカ大湖地域※で情勢が急激に悪化
※旧ザイール、ブルンジ、ルワンダ

1995

◎ユーゴスラビア紛争（1991年～1999年）
UNHCRは戦闘下で緊急支援を開始

1996

◎ボスニアのスレブレニツァで大虐殺。
停戦後UNHCRは難民の帰還を支援

「（現地の女性たちに）なぜもっと早く来て惨劇を防ぐことができなかったのか、問いつめられました。このときの辛い思いは忘れられません」[3]

©UNHCR / Panos Moumtzis

旧ザイールで、ルワンダ難民の子どもたちと

1998

◎旧ザイールで内戦が泥沼化、戦闘で多くのルワンダ難民が死亡。UNHCRは難民のルワンダへの救出活動を展開
◎アフガニスタンでタリバンがカブールなどを制圧

◎コソボ紛争開始。
NATO軍がユーゴスラビアを空爆、
数十万人の難民がマケドニアとアルバニアに避難
◎イラク北部にクルド人約1万人がUNHCRの支援で自主帰還

◎独立をめぐり混乱の西ティモールで
UNHCR職員3名が惨殺される

「任務に赴く途中の事故や勤務中に殺された仲間全員のことを考えると、こみあげる悲しみと怒りを禁じえないのです」[1]

2000

©UNHCR / V.Melsner

アルバニアでの記者会見

2001

◎退任

©UNHCR / Susan Hopper

「家を失い、最も貧しい境遇の人々を守るという皆さまの約束を尊重して下さい。最前線で難民に寄り添う、人道支援従事者を尊重して下さい。そして何よりも、すべての難民を尊重して下さい」（UNHCR執行委員会 最後のスピーチ）

出典：1 緒方貞子「紛争と難民　緒方貞子の回想」（集英社）　2 東野真「緒方貞子　難民支援の現場から」（集英社新書）　3 野林健・納家正嗣「聞き書　緒方貞子回顧録」（岩波現代文庫）

特別インタビュー

フィリッポ・グランディ国連難民高等弁務官

かつて緒方貞子さんの官房長として重責を担い、今では国連難民高等弁務官としてUNHCRを率いるフィリッポ・グランディ。インタビューで、過酷な活動現場での緒方さんとのエピソードや、彼から見た緒方さんの人間像、個人的な思いについて聞きました。

©Yuki Asada

**緒方さんに初めてお会いしたのはいつでしたか？
第一印象はどうでしたか？**

初めて関わりがあったのは1991年、私がイラクで働いていた時で、イラン等へ多くのクルド難民が逃れているさなかでした。当時現場は危険で、**多くの職員が「もう少し待つべきです」と言いましたが、緒方さんは「私は行きます」と告げたのです。**本当に勇気のいることでした。就任後初の視察の一つに、高等弁務官である彼女が保護するべき難民のすぐそばへ行くことを選んだのです。まだ34歳で経験の浅い私にとても強い印象を残しました。現場の私たち職員にとって、**「緒方さんは私たちのようだ。最前線の私たちのために闘ってくれる人だ」という大きなサインでした。**そして以後10年間、彼女はそれを実践したのです。

**緒方さんはかつて「小さな巨人」と言われました。
グランディさんの言葉で緒方さんをどう表現されますか？**

緒方さんは外見的には小柄だったかもしれませんが、とても強い方でした。**その内側にある強さ、知性の力、非常に鋭い心理的なセンスに、誰でも会ってすぐに引き込まれてしまいます。**彼女はとても強いと同時に控えめでした。非常に冷静で感情を露わにせず、難しい緊急事態における大きな信頼、信用につながっていたと思います。

緒方さんはどんなふうにUNHCRの活動を変えたと思われますか？

多くの側面がありますが、重要な点は2つです。まず、緒方さんは**UNHCRの緊急事態の対応能力を拡大**しました。彼女は大きな人道危機の中でUNHCRを指揮しましたが、最も象徴的なものにユーゴスラビア危機があります。緒方さんはこの危機に大きく関わり、UNHCRはユーゴにおける主要な人道支援機関となりました。**今でこそ多くの人道支援団体が最前線で緊急支援を行っていますが、当時はUNHCRがずっと先を行っていました。とても先見の明があったのです。**

©UNHCR / Sylvana Foa

1993年7月、ボスニアを視察

もう一つはメディアとの連携です。緒方さんは私たちにメディアに出るよう促しました。もし支援を得たいなら、人道危機で何が起こっていて、助けるために何が必要なのかを知ってもらわなければと考えたのです。それまではごく限られた上層部の人々だけがメディアに出ていましたが、その役割を現場の職員にまで広げたのです。

著書※の中で、緒方さんはザイール（現コンゴ民主共和国）の現場のグランディさんから直接電話を受け、重要な決断をしたと書いています。その時のことを教えてください。
※「紛争と難民　緒方貞子の回想」（集英社）など

私は当時、内戦下のザイールでの活動を指揮していましたが、ルワンダ難民はザイールで身動きが取れない状況でした。UNHCRは彼らを救出し避難させる任務を負っていました。とても危険で政治的にも利用されていた状況でしたが、難民を見捨てることはできない。とどまるか、撤退するか。若く経験があまりなかった私にはとても難しい決断でした。そこで緒方さんのオフィスに電話したのです。緒方さんは直接私の電話をとり、討議の後「あなたの意見は？」と尋ねました。**私は「とどまるべきだと思います」と言いました。本能的にそう思ったのです。UNHCRは常に、苦しんでいる難民のそばにいなければならない。それが私たちの責任です。**しかしそのために大きな犠牲を払っていました。それでも緒方さんはとどまる決断をしたのです。正しい決断でした。私たちは多くの命を救ったからです。今私は高等弁務官となり、かつての私のようにジレンマに陥った現場の職員から電話を受けることがあります。私は常に、職員を助けられるよう最善を尽くしています。

緒方さんと働いていた時の最もエモーショナルなエピソードを教えてください。

1994年、私が最初にザイールにいた時です。100万人ものルワンダ難民が流入する緊迫した中でコレラの流行が発生し、わずか数日で約3万人がひどい状態で亡くなりました。緒方さんは勇敢にもその直後に来たのです。難民に会い、UNHCRの支援をその目で確かめ、最前線の職員を助けるために。この時に私は初めて緒方さんに会いました。緒方さんは職員を大げさにねぎらうことはしません。いつもクールで冷静です。「この仕事を続けなければなりません。これが私たちの任務です」と話す。彼女はこの任務の

本質を理解し非常に重要なものとしてとらえ、私たち全員がその責任を果たすべきだと考えていました。とても自然かつ明白で、議論など不要でした。その姿は、どんな大げさな表現よりもはるかに私たちを奮い立たせました。私は彼女のその視察での姿から本当に多くを学んだのです。

彼女は、包囲下のサラエヴォでも防弾チョッキとヘルメットで最前線を視察する姿をメディアに公開した、初の人道支援のリーダーでした。その姿は強いインパクトを与え、彼女はバルカン危機のシンボルになりました。私は後年彼女と当地を訪れましたが、彼女は伝説でした。人々は決して彼女のことを忘れていませんでした。危険で狙撃兵に狙われる恐れもあった中、彼女が大きな危険を冒して現地を訪れたことを人々は知っていたのです。

©UNHCR / S. Foa
1992年、サラエヴォ空港にて

緒方さんはいつもグランディさんに全幅の信頼を置いていたそうです。なぜだと思われますか?

そうだと良いのですが(笑)。最初私は彼女のアシスタントになり、その後官房長になりました。一緒に多く旅をし、スピーチ原稿を書くなど様々なサポートを行う中で、とても生産的で有益な関係を築き、友情を培ったと感じています。緒方さんは厳しい方でしたが、一緒に働きやすく、サポートできて幸せでした。彼女は常に提案や助言にオープンで、信頼できる方だったからです。退任後も信頼関係と友情を保てたことを本当に光栄に思います。

緒方さんの言葉で、忘れられない言葉はありますか?

彼女は私たちに対しても、安全保障理事会でも大学でも繰り返しこう言いました。「**人道危機は政治的なものです。私たちは難民に対し人道支援を行うことはできます。しかし解決は政治的になされなければなりません。人道支援で解決はできないのです**」。今の時代なら誰もがそう言います。しかし当時は新しい考え方でした。緒方さんは人道支援のリーダーとしてそれを示したのです。緒方さんは決して挑発的にも攻撃的にもならず、不必要に大きな声を出したりもせず、リーダーたちに人々への義務を思い起こさせ実行を強く促した。政治家たちからとても尊敬されていた理由だと思います。

©UNHCR
国連機で一緒に移動する緒方さんとグランディ国連難民高等弁務官

彼女は優れた国際主義者で全てにおいてとてもグローバルなアプローチをしましたが、同時に大変日本的で、日本にとても愛着を持っていました。彼女は私に言ったものです。**「フィリッポ、どんなに世界に接するようになっても、決して自分の母国のことを、自分のルーツを忘れてはいけないのです」**と。

私が原稿を担当した、アメリカの会議での緒方さんのスピーチのことを思い出します。彼女が決めたタイトルは「日本と私」。それは日本への愛情の証であり、感動的なものでした。**他国と地理的に離れ、海に囲まれある意味で孤独な日本に対して、もっと世界へ開いていくようにと願うものでした。**彼女がどれほど日本に対してオープンであることを願い、働きかけ続けてきたかということは、私が語る必要はないでしょう。

©UNHCR / Mark Henley
2019年10月31日、UNHCRジュネーブ本部で、職員を前に緒方さんについて語るグランディ高等弁務官。この後職員全員で黙祷を捧げた

◆インタビュー後記◆

インタビューの間、グランディ高等弁務官の言葉の端々には緒方さんへの強い尊敬と親愛の念があふれ、とても熱がこもっていました。そして、緒方さんを語ることはUNHCRの活動の真髄を語ることでもあると感じました。彼の語るかつての緒方さんの姿が、今のグランディ高等弁務官の姿勢や発信する言葉と全く矛盾しないことにも強く感銘を受けました。緒方さんの思いを誰よりも受け継ぎ、UNHCRを通し世界中に伝え続けているのはグランディ高等弁務官ではないかと感じました。インタビューの完全版は以下でご覧いただけます。今回掲載できなかったエピソードもありますので、ぜひご一読下さい。

https://www.japanforunhcr.org/archives/hcinterview202006

参考文献──緒方さんをより深く知るために

○緒方貞子「紛争と難民　緒方貞子の回想」
集英社　2006年
○東野真「緒方貞子ー難民支援の現場から」
集英社新書　2003年
○野林健・納家正嗣 編「聞き書　緒方貞子回顧録」
岩波現代文庫　2020年
○緒方貞子「私の仕事 国連難民高等弁務官の10年と平和の構築」　朝日文庫　2002年

「緒方貞子さんと私」

池上 彰さん(ジャーナリスト) 2013年から「国連難民サポーター」として毎月ご支援

私が緒方さんの偉大さを痛感したのは、1991年の湾岸戦争のとき。フセイン政権の弾圧から逃れようとイラク国内のクルド人が隣国トルコに逃げ込もうとしますが、トルコは国境を封鎖。クルド人たちは行き場を失います。それまでUNHCRは国外に逃げてきた難民を救済する組織でしたが、緒方さんは「困っている人を助けるのが仕事でしょう」と、国内避難民も支援するようにしたのです。これぞリーダーのあるべき姿。困っている人がいれば、誰でもどこにいても手を差しのべる。すべての国際機関が見習うべき決断だと思います。

石川 えりさん(認定NPO法人 難民支援協会 代表理事)

緒方貞子さんは、一貫して、日本の難民にも心を砕いてくださいました。シリア危機に際して「難民受け入れは積極的平和主義の一部」と、受け入れに消極的な日本政府の姿勢をただし、また濫用取り締まりを優先した方針に対して、保護の観点から懸念を表されました。難民支援協会の活動にも深い共感を寄せてくださり、常にたいへん心強い激励の言葉をいただきました。緒方さんが示してくださった、現実に妥協せず現場から行動する難民支援を私たちも微力ながら引き継いでまいりたいと思います。心からご冥福をお祈りいたします。

by United Nations Photo

中満 泉さん(国連事務次長・軍縮担当上級代表) UNHCRに1989年～2000年まで在籍

緒方貞子さんと最後に2人でお話ししたのは、2016年12月末のことでした。オフィスにお弁当を取ってくださり3時間近く色々なことを話しました。1991年にトルコ・イラク国境地帯で初めてお会いしてから師と仰いだ緒方さんは、私が辞する時に見送ってくれ、「ぜひもう一度ニューヨークにいらして下さい」と言う私に「あなたに言われたら、なんだか行きたくなっちゃうわね」とおっしゃったことを昨日のように思い出します。
何よりも命を救うことを第一とした緒方さん。パンデミックという戦後最大の危機に人類が立ち向かう今、一人でも多くの命を救うためになすべきことを考え、党派を超え官僚主義を排し、どうやって実現するかを全力で模索せよとの彼女の声が聞こえます。

下澤 祥子(UNHCR グローバルサービスセンター所長)

©UNHCR

私は1997年から緒方高等弁務官のご退任まで、補佐官を務めさせていただきました。緒方さんから学んだものは沢山ありますが、中でも現地など各方面からの情報を総合的に判断し、難民の視点に立った決断を下すスピードが迅速でした。前例にとらわれず、「ここで今何が重要なのか」を見極め、政策と指揮をとり続けられました。常に前線に立たれ、おそらくUNHCRで誰よりも現場で何が起こっているのかご存知だったと思います。退任時の「官僚主義に陥らず、自分に何ができるか自分の頭で考え続けてほしい」という力強いメッセージは忘れられません。

©国連UNHCR協会

中村 恵(国連UNHCR協会 事務局長特命・渉外担当)

1991年2月、私は緒方さんのジュネーブ本部での初スピーチをUNHCR職員の一人として聞きました。2000年まで約10年間を国際スタッフとして勤務し、緒方さんの退任前に当協会の設立に参画。協会に在籍しつつ約2年半、ニューヨークで回顧録を執筆された緒方さんの日本での窓口を兼務しました。ここ数年お目にかかる度に「UNHCRの活動を支えてくださる、個人の継続支援者の輪が大きく広がっています」とご報告すると、高等弁務官として資金集めには特に苦労されただけに、緒方さんは大変喜んでくださいました。

終わりに――緒方さんの志を受け継ぐのは私たち

「緒方さんの存在があったからこそ、UNHCRの支援を始めました」。こうした声を、今も変わらずいただきます。
今なお、緒方さんは多くの人々の心に生き続け、UNHCRの活動を支え難民の力となり続けています。
「**日本のみが孤立して暮らしていけることはありえません。国を開き、多様性をそなえ、高い能力を持って外との関係を築くこと。そして国際的な責務を果たすこと。これなくして、日本の明るい展望は望めません。そうした方針を積極的に打ち出し、果敢に行動すべきです**」※ そう訴えた緒方さんが退任されて20年。新たな危機に直面している今こそ、緒方さんの志を受け継ぎ、世界と共に問題に立ち向かう時ではないでしょうか。※「聞き書　緒方貞子回顧録」(岩波現代文庫)

今号の表紙

©国連UNHCR協会 / Atsushi Shibuya

ケニアの高地イテンで合宿中の南スーダン難民、ローズ・ナティケ選手。難民選手団の旗手を務めた2016年のリオオリンピックに続き、東京2020への出場を目指し、厳しい練習に励む。

CHARITY TOKYO MARATHON 2021

東京マラソン2021チャリティ

ご寄付の募集が始まります（東京マラソン2021においてはチャリティランナーの募集は行いません）。

当協会は、皆様からのご寄付を紛争で故郷を追われた難民の子ども・若者の生きる意志につながるスポーツや教育の支援に役立たせていただきます。

2021年3月7日（日）開催予定
◎7月上旬ご寄付申し込み受付開始。詳しくは以下ウェブサイトをご確認ください
◎東京マラソン2021チャリティ公式ウェブサイト
https://www.marathon.tokyo/charity/

国連UNHCR協会は東京マラソン2021チャリティ事業の寄付先団体です。

WithYou
国連UNHCR協会ニュースレター
[ウィズ・ユー]
第43号｜2020年6月

発行
特定非営利活動法人 国連UNHCR協会
[国連難民高等弁務官事務所・日本委員会]
〒107-0062
東京都港区南青山6-10-11
ウェスレーセンター3F
Tel.0120-540-732
Fax.03-3499-2273
www.japanforunhcr.org

編集
国連UNHCR協会

デザイン
NDCグラフィックス

印刷
凸版印刷株式会社

©Japan for UNHCR
本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

From the Field

難民支援の現場から 21

藤田若菜 ふじた・わかな

©国連UNHCR協会 / Atsushi Shibuya

ケニア・ナイロビ事務所にて

私は2015年から約1年、UNHCR駐日事務所の法務部で日本の難民保護の法制度の整備や裁判官など法曹向けの出版物の翻訳等に携わりました。2017年にケニア事務所に移り、1年目は難民認定手続を担当しました。

難民申請者が難民として該当するかどうかを判断する手続で、日本では法務省が行いますが、ケニアではUNHCRと政府が共同で担当しています。2014年頃から難民認定手続は政府に移行され、私は担当の個別審査の他に政府の能力強化も担当し、面接官の研修やモニタリング等を行いました。

2018年からリスクマネジメントの部署に移りました。実はケニアでは警察など様々な所でわいろを渡す習慣が一般的で根強く、難民支援の現場でも不正が見られます。2016年にUNHCRに関係した不正が見つかり、根本的な制度改善が必要とされ、当部署ができました。

私は事務所を運営する上でのリスク対応にあたり、月一度はダダーブ難民キャンプを視察し、パートナーNGOのモニタリングも行っています。それまで難民は不正を通報する場所がなく、通報しても仕返しを受けるなど報告して良いことがありませんでした。でも私たちの部署によりヘルプライン等の通報制度が整備され、ダダーブ難民キャンプの難民から通報を受けて対応した際、最後にこう言われたのです。「折り返し電話をくれたのも、こうしてきちんと話を聞いてくれたのもあなたが初めてだ」と。私が難民一人一人にできることは限られているので、とてもうれしく思いました。

逆に残念な思いをしたのは、ある難民申請者のケースです。面談の結果、私は認定できると判断したのですが、事務所内で見解が異なり留保となりました。UNHCRは申請者の話の信ぴょう性が51％以上と判断できれば難民認定できるとしています。申請者が多く面接を受けるまで約3年かかる上、難民は何年も前の逃げてきた事情を説明しなければならず、証拠の入手が難しいことなどへの考慮が必要です。審査結果が出ない限り難民は状況が分からないので、彼らにとっては「UNHCRは何もしてくれない」と受け取られてしまいます。内部の見解の違い等により難民が影響を受けることは残念です。

UNHCRは条約から明確に「難民の保護業務がある」と権限を与えられています。私が難民認定に携わりたかったのは、一個人の法的地位を変えられる珍しいスキームだからです。国際機関が一個人を保護できる、というのはUNHCRの一番の強みだと思います。UNHCRは大きい機関で、一職員としてできる事は限られており、難民保護に関わる団体は多くありますが、私は強みを持つUNHCRで最善を尽くすことで貢献したいと思っています。

難民保護の分野でUNHCRといえば知らない人はなく、UNHCRというだけである程度信頼は得られます。私の仕事はその信頼を失わないことだと考えています。心掛けているのは相手方の人と話をする時、電話やメールでなく、自分からその人の事務所へ行って直接話をすること。あとUNHCRだからと「上から指示する」ような態度をとらないこと。どんな人も仕事へのプライドがあり、その人しか分からないことがあります。それを尊重し、「私」という個人との信頼関係を築いてもらうのが大事だと思っています。

難民が増える中、各国からの拠出金は逆に減っています。その影響を受けているのは他でもない難民です。皆様からのご支援に心から感謝いたします。そのご寄付をきちんと使い、最大限難民のもとへ届けられるよう努力しています。どうぞ今後ともご支援をお願いいたします。

プロフィール
UNHCRケニア 準リスクマネジメント・コンプライアンス担当官。早稲田大学 国際教養学部卒。ウィーン大学国際公法修士課程（LL.M）修了。UNHCR駐日事務所法務部、外務省専門調査員を経て2017年に準難民認定審査官（JPO）としてUNHCRケニア事務所に赴任。2018年より現職。

6月20日は世界難民の日！

2000年に国連によって制定された「世界難民の日」。紛争や迫害で家を追われた難民や国内避難民に思いを寄せ、連帯を表す日です。ぜひこの日、世界の難民について行動を起こしてみませんか。
難民の日にちなんだイベントはこちらから。ぜひご参加ください！
http://unhcr.will2live.jp/wrd2020/

©Kei Sato Dialogue for People